

家庭とも学校ともつかない居場所における子どもの「奮闘」過程
- 主に遊びの在り様に着目して -

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域 人間形成・臨床教育クラスター

本論文は、児童期・思春期の不登校の子どもが集うとある居場所（居場所 A）での活動に、筆者自身が学生ボランティアとしてかかわった約 1 年間にわたる記録である。

居場所 A は現時点において教育行政のものと施設でも民間施設でもなく、NPO 団体による立ち上げといったわけでもない。不登校の子どもを抱える親同士が手を組んで地域に根ざした子どもの居場所作りへ乗り出したわけだが、まだその活動開始からそれ程期間を経ていなく、そこにかかわる親も子どもも、そして学生ボランティアも、その活動の全てに於いて手探りの観が強い。

例えば居場所 A におけるその日の活動内容などは特にあらかじめ決められていなく、タイムテーブル等の準備もないなど、とりあえずの船出の観もあり構造化された「枠」組みによる「護り」を保証し難かった分、その活動も様々な揺れに直面した。そしてそれでも子ども達はそこでまがりなりにも遊ぶなどして時を過ごしていたわけなのであるが、約 1 年間にわたる遊びの持つ意味やその内容も一様ではなく、常に変化していたように見受けられる。

そこで居場所 A で一体子ども達が何をしようとしていたのか、自我の防衛機制をも自分を支える活動として含め、その変化の過程を「奮闘」とする神田橋の言に倣い（神田橋 1990）それを尊重し、子ども達と共に遊びつつかわりあいながら、主に遊びの在り様に着目、それを観察し、臨床心理学的視点をその場に差し挟むことを試みた。

結果的に子ども達は、家庭とも学校ともつかない、もしくは「養育」の場とも「教育」の場ともつかない中間的な場所である居場所 A において、何をしても手についていなさそうであったり、遊んではいるものの遊べないなさそうに見受けられたり、そういった揺れを顕著に示してきたように感じられた。かわり始めた当初は、「ほんもの」（安永 1980）を強く志向する風情があったとでも理解するべきか、そのかわりにおいても幾分頑なで融通の利かない印象を受けたりすることもあったのだが、子どもの側の「気遣い」にも支えられてか、遊びは遊びとして成り立っていたように感じられた。しかしながら、経過と共にそういった遊びにも揺れが生じてくるようになる。そしてそれは、そもそも「養育」とも「教育」ともつかない場で、“ボランティア活動における子どもとの「対等」な関係とは何か”といった自分の拠って立つスタンスの問題や、“子どもに指導してはいけないのか”といった疑問など、筆者を始めそこにかかわる学生ボランティア同士の中にも浮上していた、立場上、意識上の“どちらともつかなさ”の問題に端を発していると考えられた（筆者自身も学生ボランティアという「ジェネラリスト」としてその場にかかわりつつ、臨床心理学的にその場をみるという実践との矛盾等、“どちらともつかなさ”に難渋していた）。そしてその“どちらともつかなさ”による学生ボランティアの活動の不安定さ - 延いてはその場を護る「枠」組みの動揺 - を子ども達は鋭敏に嗅ぎ取ってそれに抗議すべく「奮闘」している場合もあった。そしてそういった動揺は連関、相乗し合いながら、子どもはともすれば遊べなくなっていく。

しかしながらそれでも学生ボランティア同士で地道に連携を取り続け、ボランティアであることの立場上の限界や必ずしも都合がよくなかった点を踏まえつつも、子ども達と受容的・共感的に接し続け、そこでの活動や揺れを共にしていく中で、再び子ども達は遊べるようになっていった。そしてそれに呼応してが学習やバイトといった新しい事態へとその歩を少しずつ進めつつある。

筆者自身もその活動において“どちらともつかなさ”という曖昧さの最中で子ども達とのかかわり - 延いては学生ボランティアなり、この場でのかわり - において自信をなくしてくたびれていくというクライシス状況を経ることになったわけなのであるが、それを経てまずは子どもの「もどかしさ」（*滝川 1986）そのものに“もったいない”と、その眼差しが向き易くなり、そのかわりにも幾ばくかのゆとりができた。それはかわりの在り方を比べ、それを評価し合ううちにはみえてきにくい類のものであると考えられた。学生ボランティア同士の連携が必ずしもうまくいわずに、ともすればそういった向きに流れていきがちな側面がなかったわけでもなかったが、家庭とも学校ともつかない中間的な居場所というこの場の性質が、そういった事態を先鋭化させることなく、子どもの「もどかしさ」そのものに眼差しを向き易くさせてくれたものとも考えられる。そしてそこに、家庭とも学校ともつかない中間的な場所の意義も見出せてくるのではないかと考えられる。

そして学生ボランティアの側にも生じた、以前よりかはゆとりと、子ども達の側に生じた、以前よりかはゆとりが相俟ってか、上に記したように子ども達は再び遊ぶようになっていったように見受けられた。そしてかわり始めた当初の子ども達の幾分頑なで融通の利かない印象もほぐれていき、子ども達同士の活発なやり取りなどもこの場に見られるようになってきた。以上が当論文の概ねの要約である。

しかしながらそういった今まで述べてきたような立場上、意識上の“どちらともつかなさ”は、本論文でも折に触れて述べられていくことになるように子ども達にもその動揺を伝播させていってしまうがあることもしっかりと明記しなければならない。何はともあれ学生ボランティア同士の連携、延いては親達との連携を取り合って、地道に子ども達を支えあっていくことが何よりも肝要であると思われる。